読書

にいがたの一冊

等身大の姿から伝わる魅力

啄木日記を読む

池田　功著

「明治時代の文学作品中（略）私を一番感動させるのは、ほかならぬ石川啄木の日記である」と書いたのは、日本文学研究者のドナルド・キーン氏である。彼は言う。漱石や鷗外の小説をさし置いて啄木の日記を挙げたのは、そこにある「ほとんどすべての文章が、私の心を打つ」からである、と。本書の著者池田功氏もあとがきに、啄木の「生きる情熱と真剣さが（略）日記から響くように伝わってくるのです」としたためている。

啄木の日記を読んだ者は、その真実に心を打たれ、その言葉を胸に響かせずにはおれないのだ。

啄木は16歳で日記を書き始めてより、26歳で亡くなるまでの10年間に13冊の日記を残した。本書はそれらをつぶさに読み解き、その魅力を伝えたものである。平易な文章・語りかけるような文体は、啄木の生きた姿をひとりでも多くの人に知らせたい、という思いの表れであろうか。

日記からの引用は、その時々の等身大の啄木を伝えて興味深い。意気高く未来を語る啄木もいれば、敗残の身を故郷の風に吹かせている啄木もいる。文学と生活の狭間（はざま）で身悶（もだ）える啄木も、「人民の中へ行きたい」と拳を握りしめる啄木もいる。

それらが、豊富な裏付けをもとに読み解かれるとき、「読む」とはこういうことなのか、と新鮮な驚きに包まれる。

特に啄木日記の面白さ・読みやすさを支える客観性・ストーリー性を帯びた綿密な描写について、啄木がいずれは日記を作品化するという意図のもと「未知の読者を意識して」いたためではないかという指摘は、大変興味深く、説得力のあるものであった。

「文学という魔物に取り付かれたかのように文章を書き続けた」情熱と、苦難に満ちた後半生を果敢に生き抜いた「強い精神力や生命力」――そこに今を「生きるヒント」があるのではないか、と著者は言う。「私はそれを学びたい」と。

読者もまた、啄木のようにひたむきに生きてあらねば、と思わずにはいられないだろう。こんなあてどない時代だからこそ、なおさら。

池田功氏は上越市吉川区出身。明治大学教授。国際啄木学会副会長。

啄木のすべての作品を深く読み込んだ氏が、その日記の世界を余すところなく語った本書は、啄木の日記を本格的に論じた初めての本であるという意味においても、記念すべき一冊といえる。

山下　多恵子

（国際啄木学会理事・「北方文学」同人）

■新日本出版社（1995円）